インドネシア人社員のキャリア形成

―雇用機会としての在インドネシア日系企業の位置付け―

平成 21 年度入学
参加したフィールドスクール：インドネシアフィールドスクール
調査地（調査国）：インドネシア共和国
下山　智輝

キーワード：日系企業、インドネシア人社員、キャリア形成、転職

自身の研究テーマについて

スハルト政権以降のインドネシア経済は、積極的に外国資本を誘致することで成長を果たしてきた。企業進出では日本や欧米などの先進国､NIEs や他の ASEAN 加盟国と続き､最近では中国がこれに加わる。このことは労働力市場に雇用機会を創出し、同時に多国籍化を促してきた。

日本企業によるインドネシア進出の目的は、現在では“廉価で豊富な労働力”や“巨大市場の獲得”にくわえ、商品の開発・研究機能を日本から移転するなど、企業の世界戦略の上でも、インドネシアは重要な拠点となりつつある。

それに伴い、社内に占める日本人駐在員の割合は大きく低下し、経営の現地化が進んだ。しかし、一方でインドネシア人社員の目には、より少数の日本人が経営トップに集中することが、企業を独占されているようにも映るという。こうした不満は、上昇意欲の強い優秀からよくきかれ、彼らが欧米企業へ転職する理由のひとつとなっている。

以上から本研究は、在インドネシア日系企業における、インドネシア人社員のキャリア形成に着目する。具体的には、企業が提供する金銭的・非金銭的インセンティブに対し、彼らがどのような判断・行動をとり、自身を企業内に位置付けるのか、また転職していくのかを観察する。そして、雇用機会としての日系企業の位置付けを転職経験者へのインタビューも含めて明らかにする。

フィールドスクールから得られた知見について

インドネシアには、宗教や言語などの文化的背景にはじまり、社会経済状況にいたるまで、日本に比して大きな地域差が存在する。それ故、今回のフィールドスクールにおいて、自身の研究対象地域である首都ジャカルタのみでなく、バンテン州の農村地域を訪問し、そこでの生活や問題を垣間見ることが出来たのは、非常に大きな意義があった。

バンテン州の農村では、若年労働力の都市への流出現象が見られた。このため、10 代後半～30 代の働き手が不足しているという。この現象の背景には、出稼ぎ労働者が現金収入源となっていることや、村内に高等学校以上の教育機関がない事、更には若者の都会志向が存在する。

今後研究を進めていく上で、こうした賃金や雇用機会、教育水準をはじめとする地域差を視野に入れることで、都市労働者の社会経済的背景を踏まえた、労使関係の理解が可能になると考える。

今回の FSC に参加した感想についてのべておくと、ホームステイという環境下ではプログラム以外にも数多くのイベントがおこなわれる。そのため、期待していたよりも、議論や発表の回数の割に準備時間が少ないという気がした。一方、去年の参加者が指摘していた出国前の事前学習は、現地プログラム

内容と関連しており、調査活動をする上で大変有益だった。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

研究地域や研究テーマの異なる多くの学生が参加しているため多様な観点からの質問や意見が表明され、そこから学ぶ点が多かった。それゆえ、今後とも彼らと活発な意見交換をおこなう必要があることを実感した。

また、他者を理解することの具体的な諸側面を体験することができた。住民と「村の観光地化」という共通テーマについて議論を重ねるなかで、住民のニーズを把握することの難しさを痛感するとともに、外部者であるがゆえに気付く現象のあることも知ることができた。

写真　1　タマンジャヤ村の少年達

写真　2　ウジュンクロン国立公園事務所訪問

写真　３　村の小学校訪問